

第二学期前半には中高共にクラスやクラブまた学年等で取り組むさまざまな行事があり、やり遂げた手応えを感じている人が多いと思います。本気で取り組み一生懸命やった人ほど、喜びや得たものは大きく、また成し遂げるためにさまざまなつながりや支えを実感し、感謝の心が湧き上がる経験をしたのではないのでしょうか。

私たちの世界は、さまざまなことが便利で快適になりました。また簡便にいろんな楽しみを享受することができるようになりました。そんな中で生活していると、私たちは自分の欲するものをいかに楽に手軽に手に入れるかに関心を持ち、面倒を嫌い、できるだけ努力せずに苦労なく進んでいけることを知らず求めらるようになっていきます。時には、いわゆる「ズル」をしてでも、そうしたのではありませんか。そういうことからか、私たちは面倒なことではできるだけ他人にしてもらいたいと、さまざまなサービスにお金を支払って代行してもらいます。結果、してもらったことが圧倒的に多くて、する・させていただくことが大変に少なくなりました。そこに、本当の喜びや、生きている意義の実感があるのでしょうか。

よく「人事を尽くして天命を待つ（盡人事而待天命）」といわれます（福沢諭吉の言葉といわれていますが、出典は宋の胡寅『読史管見』。「自分でやれることは精一杯やって、あとは天に任せるしかない」と、「良い結果を期待していますので、天の神様よろしくお願ひしますよ」というような意味で、結果については他人任せで使っています。ところが、本校の初代校長清沢満之先生は、（他方回向について）「天命に安んじて人事を尽くす」（『転迷開悟録』とおっしゃっておられます。どういうことでしょうか。

「他力」とは、「他人任せ」の対極の言葉で、最後の最後に頼りになる究極の拠り所である、阿弥陀如来の願いの力とそれはたらきのことです。その大きなゆるぎない安心の上で立つて、与えられた環境条件の中で、自分のできることを惜しまず尽くし続けるということでしょうか。努力できることを、できたことを喜ぶということもあります。予想される結果が自分にとって都合がよいかどうか、そういう善悪・好悪・快不快等をこえて、目の前のなすべきことに、できる限り誠実に取り組んでいく。本校の第三代校長沢柳政太郎先生は、「教育とは誠を尽くすことである。誠を尽くすとは、いつでもどこでも誰とでも、駆け引きをしないことである」と、おっしゃっておられます。

自分にとって都合の良いことには多少の努力もするが、嫌なことはしたくないのが我々です。与えられた環境条件から目を逸らさず、思い通りにならない現実の中で、どんなところにおいても、安んじて人事を尽くそうとする、その意欲はどこから出てくるのでしょうか。

無理矢理頑張る世界ではありません。何かそこに支えというか、「大丈夫、心配ないよ」というものがある時、私たちは頑張れるのでしょうか。すべてを包み込み、うまくいかなかった自分をも認められる世界に触れて、挑戦もできるのでしょうか。あるいは、帰り場所がはっきりしていれば、安心して出て行けるとも言えます。私たちのいのちは、他のあらゆるいのちとのつながり中で、願いのかけられた尊いいのちです。どんな境遇の時でもです。どんな時も一人に切り離されていることはありません。自分としてその実感が感じられなくとも、支えられ包まれていのちを生きています。

できないことは助けてもらい、自分のできることは惜しまず誠実に尽くし、できることを広げていきましよう。生かされて生きている事実を喜び感謝し、そこに安心して立つて、自他を生かすことに力を尽くして欲しいものです。生きている意義を実感するでしょう。